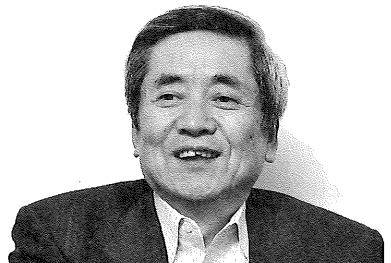


なぜいまオランウータン保護か？

「オランウータンを守ることは、人類の明日を守ることなのです」

「オランウータンは熱帯雨林の象徴的存在」。住友林業のサラリーマン時代、森林伐採で彼らを森から追い出した立場から一転、後半生をかけ、オランウータンの保護に力を入れる日本人の懺悔と情熱――。



NPO法人 ボルネオ オランウータン サバイバル ファウンデーション 日本代表理事

宮崎 林司

Miyazaki Rinji

熱帯雨林が地球の気候を安定させている

―― 宮崎さんは非営利法人でオランウータンの保護に力を入れていきます。どうしてですか。

宮崎 オランウータンの生息地の一つ、ボルネオは氷河期も乗り越えてきたエリアなんです。一億年以上の歴史があると言われるんです。それは、氷河期で生物がほとんど追い詰められて、そこへ集まってきたからではないかと。だから生物種が非常に多い。地球上の半分ぐらいの種がいると言われています。

気候が一番安定しているのが赤道の周りです。暑いなりに

ずっと暑い。安定させている要因が熱帯雨林なのです。その熱帯雨林で木が減少していき、地球の気候に大きく影響しています。

熱帯雨林は五層構造になっています。一番大きい木はビルだとして二十階建、七十階近い。そういう木が揃っている環境が熱帯雨林です。大きい木は種子も大きい。種子は風で飛んで行ったり、動物に運ばれて広まりますが、大きい種子はやはり大きい動物でないと運べません。中でもオランウータンが広いエリアを動き回るので、ボルネオとスマトラの熱帯雨林はバランスが保たれてきたのだと思います。

オランウータンは大きい木の上に住みかです。木材伐採で大きい木をとっていくとオランウータンの家はどんどん壊されて追い出されます。彼らがいなくなると今度は大きな種子のエリアが広がらなくなるのです。

オランウータンの生息地は世界でボルネオとスマトラだけです。現在、百年前の八割、二万五千頭ぐらいいきません。人間はその間に二十五億人から六十八億人に増えていきます。人間が増えた分、オランウータンが確実に減ったのは、やはり人間がいろいろな生物圏を食いつぶしてきたのだと思います。オランウータンが滅ぶなら

いずれ人間も、ということになるでしょう。

―― オランウータンを守ることが人類にとって大事なので、具体的にNPOはどんな活動をしているのですか。

宮崎 今やろうとしているのは、わずかに残された天然林をそのまま残すことです。そのエリアにオランウータンを放します。そのためにオランウータンを訓練しています。

熱帯雨林のあることがどれぐらいの経済効果なのか。今までわからなかったことをあるコンサルティング会社が算定しました。CO₂の吸収力、土壌の安定、林産物など四項目で換算した

ら、一杉年間、4万1000円の価値を生むことがわかりました。これはユーロの円換算です。ところが伐採すると一杉四十立方メートルしか木材は取れません。一方、200メートルで計算すると8000ドル、250メートルでも1万ドルです。

一度とつたら百年間再生しませんから、その後は一銭も生みません。牧場をやるとしても年間1万円ぐらいにしかなりません。一方、4万円が百年続けば400万円です。だから経済原理からいっても伐採は損です。とつた人にお金は入りますが、とられた周りの人が損です。

人間が経済的だと思って利用してきた形が、いかに経済的でないかがわかります。森林を維持しておくことの方が価値があるのです。その意味でも保護しなければいけない。

熱帯雨林がなくなることは、地球上の生物の種の半分が地球上からいなくなることです。結果的に人類全体が損をします。しかし経済の外の話なのでなか

なか注目されません。だから、資本主義ももう一回、自然環境を組み込んだ形に変えていかないといけないのではないかなと思います。

ある意味で、オランウータンが熱帯雨林を維持してきました。熱帯雨林の被害の象徴的な存在です。保護することで熱帯雨林に目が向けられます。

人間の愚かさを 見透かしたオランウータン

―― なぜオランウータンに関わるようになったのですか。

宮崎 三十五年ぐらい前、住友林業で、ジャングルでの伐採の仕事に携わっていたときに、ジープで道路を通りかかり、すぐそばにいたんです。それが初めてオランウータンに出会ったときです。親子でした。

二匹ぐらいの近くにいて、普通は人間を怖がるものですが、全然そんなそぶりもない。

その時、自分は人間の愚かさを指摘されているような気がしたのです。人間は何でこんな暑

いところにまで来て森を壊すようなことをやっているのかと。

会社を退職して六年目、インドネシアで働いていたとき一現地のあるオーナーが、あいに来られました。今度遊びにこないかと言うので、行ってみると、連れて行かれたのがオランウータンのリハビリセンターでした。これが二度目の出会いです。

リハビリとは、街でペットとして売られたりしているオランウータンを森に帰してあげようと、ハイスクールの子供たちが言い出したもので、それに応えた先生たちが林業省に働きかけて、用地を借り、そこに施設をつくって運営をしていました。

森から追い出した張本人の私は何もしないのは調子が悪いと思ひ、活動を応援しようとして一九九六年から寄付の募集をスタートしました。

この何年か考えているのは、森を持つていることで生まれる価値です。排出権の次に出てくるREDD (Reduced Emissions from Deforestation and forest

Degradation) というものがあります。森林の劣化と減少を防ぐことでエミッションコントロールしようというものです。

このルールは四、五年前から言われ出して、二〇〇七年のパリのCOP13 (気候変動枠組条約締結国際会議) のときに出してきましたが、合意に至っていません。森林を持つているのが開発途上国で、先進国が金を出さなくてはいけないのと、仮にお金を出しても守ってくれるのかどうか担保されないからです。

ただ、実際には二国間で進んでいる、例えばインドネシアとアメリカ、インドネシアとノルウェー、インドネシアと韓国など。せっかくインドネシアとは良好関係だった日本はやっと、森林総研にREDDの研究チームが出来たところ。後れをとりました。

みやざき・りんじ
1946年三重県生まれ。71年三重大学農学部林学科卒。89年6月まで住友林業に在籍。89年7月(株)ビーコーポレーション設立。2002年NPOアジア植林友好協会、03年7月NPOボルネオ オランウータン サバイバル ファウンデーション日本を設立、それぞれの代表を務める。